

企画展 2021 4.24日・9.26日

主催: N ニュースパーク

伝える、寄り添う、守る —「3・11」から10年



東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から10年。被災地では復興への歩みが進む一方、被災者の生活再建や心のケア、産業再生などの課題があります。福島には帰還困難区域も残っています。人口減少や高齢化といった全国共通の課題も、重くのしかかります。被災地の新聞はあの日から毎日、震災や原発事故関連のニュースや話題をさまざまな形で伝えて続けています。確かな情報を伝え、日々を記録するだけでなく、そこに暮らす人々の悩みや思いに寄り添い、復興に向けた大きな力

なっています。そして、震災以降頻発する自然災害から人々を守るため、全国各地で新聞報道の枠を越えた取り組みが広がっています。本展では10年間の紙面や写真、記者らの寄稿を通じて、被災地の地元紙を中心に新聞社の報道ぶりや思いを紹介し、全国に広がりつつある新聞社の防災・減災の取り組みも取り上げます。関東大震災を報じた大正期の紙面などを通じて、デマや流言が広がりやすい災害時の情報との向き合い方についても考えます。

特別協力

岩手日報社 / 河北新報社 / 福島民報社 / 福島民友新聞社



ニュースパーク(日本新聞博物館)が主催する 企画展『伝える、寄り添う、守る 3.11から10年』

企画展 2021 4.24日・9.26日

■ 2021年3月11日付紙面

伝える、寄り添う、守る —「3・11」から10年

会場 ニュースパーク(日本新聞博物館) 2階企画展示室

開館時間 10:00~16:30(入館16:00まで) ※新型コロナウイルス対応
休館日 月曜日(祝日・振替休日の場合は次の平日)
主催 ニュースパーク(日本新聞博物館)
特別協力 岩手日報社/河北新報社/福島民報社/福島民友新聞社
後援 神奈川県教育委員会/横浜市教育委員会/川崎市教育委員会



■ 表写真解説

- ①宮城県気仙沼市の鹿折地区 津波で内陸に押し流された大型漁船があちこちに転がっていた=2011年4月21日(河北新報社提供)
- ②消防屯所の止まったままの時計=2021年2月11日 福島県双葉町(福島民友新聞社提供)
- ③自宅跡に設けた祭壇に手を合わせる男性=2020年3月11日 福島県双葉町(福島民友新聞社提供)
- ④岩手県大槌町 教職員の手が散らした大槌小学校庭(右奥が校舎)=2011年3月13日(岩手日報社提供)
- ⑤津波で壊されたままの墓石や地蔵=2021年2月11日 福島県双葉町(福島民友新聞社提供)
- ⑥放射性物質トリチウムを含んだ処理水の貯蔵タンクが並ぶ東京電力福島第一原発=2021年2月16日(福島民報社提供)
- ⑦思い出の品探し 旧気仙中校舎=2020年9月17日 岩手県陸前高田市(岩手日報社提供)
- ⑧常磐道全線開通 道路沿いには空間放射線量の表示板が設置されている=2015年3月1日 福島県浪江町(福島民報社提供)
- ⑨国道6号沿いにオープンした「道の駅なみえ」=2020年8月1日 福島県浪江町(福島民報社提供)
- ⑩全面開園した南三陸町震災復興記念公園=2020年10月12日 宮城県南三陸町(河北新報社提供)
- ⑪新設された町産業交流センターで繰り広げられた「巨大ダレマ引き」=2021年1月9日 福島県双葉町(福島民報社提供)
- ⑫岩手県大槌町 基礎整備が終了し住宅が立ち並ぶ町役場周辺=2021年1月6日(岩手日報社提供)
- ⑬「水を運ぶ少年」20歳に=2021年1月10日 宮城県気仙沼市(河北新報社提供)
- ⑭三陸鉄道 台風からの運行再開=2020年3月20日 岩手県山田町(岩手日報社提供)
- ⑮自分で収穫したミカンを食べる子どもたち=2020年12月4日 福島県広野町(福島民友新聞社提供)
- ⑯宮城県気仙沼市の鹿折地区 かさ上げした土地に新たな町が姿を現した=2020年6月17日(河北新報社提供)

I 「伝える」—— 新聞報道の10年

10年間の新聞各紙の報道を、記者らの思いとあわせて紹介します。

II 「寄り添う」—— 被災地の今

復興への歩みや課題を、特別協力4紙の報道写真を通じて紹介します。

III 「守る」—— 新聞の使命

災害時の新聞の役割や、全国に広がる防災・減災に向けた取り組みを紹介します。災害時の情報との向き合い方について、過去の事例も含めて考えます。

■ アクセス



新聞は東日本大震災をどのように伝えたか？

2011年から10年間の新聞記事が全て網羅されている訳ではないが、毎年3.11の移り変わりを追いかけるだけでも大変な労力を要する。



新聞記者の思いは如何に？

記者の思い

震災と向き合うため、新聞記者に

岩手日報社
大船渡支局記者
清川航矢氏



東日本大震災が発生した時は、岩手県内陸部の中学校2年生でした。地震とともに校舎がきしみ、必死で机の下に隠れていました。沿岸部にいた友人が心配でしたが、停電で地震の情報がほとんど入りません。12日の新聞で初めて惨状を目の当たりにして、言葉もでませんでした。

約2年後の高校1年時に、被災地でボランティアを行いました。復興は想像以上に進んでおらず、被災地が大変な時に不自由なく暮らしている自分に後ろめたさを感じました。野球部員約30人で1日中がれきを撤去しましたが、進んだのは微々たるものでした。復興の道のりの長さを実感するとともに、岩手県に生まれたからには震災と向き合っていくべきだと感じ、新聞記者を志すきっかけの一つとなりました。

2019年に入社し、20年4月から大船渡市に駐在して取材に励んでいます。地域住民の声や気持ちを聞くことは、心の復興はこれからということです。震災で住む場所や人間関係が一変した被災者が、現実を受け入れ前に進むのに10年は短すぎます。

「また帰ってくる気がするんだ」「夜に震災を思い出して眠れないよ」。素直な言葉が胸に刺さります。

被災地はこれからが本当の勝負。人口減少や高齢化、震災の風化にどう立ち向かうか、地域の力が試されます。被災地のメディアとして、使命感を持ってその勇姿を伝えたいです。

記者の思い

復興の意味を自問

河北新報社
報道部記者(当時は北上支局記者)
坂井直人氏



東日本大震災から10年、全国でまだ2500人を超える行方不明者がいます。最愛の人を病気や事故ではなく津波で突然失い、しかも手掛かりもない。家族の苦しみは想像できるものではありませんでした。

私は震災直後に岩手県の陸前高田市、大船渡市で取材し、震災6～9年目は現地の支局に赴任していました。

ある夫婦は、大船渡市で1人暮らしだった大学生の娘が行方不明でした。

「娘は海に嫁いだ」「出てこないのは、ずっといたいからかな」。夫婦は、海が見える高台に地域住民の協力で慰霊碑を建立。三陸が大好きになった娘に会いに来るかのように、児童の震災学習に協力するなど交流を深めていました。

「死亡届を出して葬儀をしても区切りならず、かえって申し訳ないばかり。墓参りも

「何も入っていない」と思うとつらい」

娘が行方不明の別の女性は、音楽や風景に胸がしめつけられては涙を流し「これが諦めなのか納得なのか分からない」と、堂々通りの日々を重ねていました。

女性は戦争の行方不明者家族に思いをはせ「高齢になった人たちに代わり、遺骨収集に参加したいくらい」と、胸の内を明かしてくれました。

現在、仙台市の本社で震災10年報道に携わり、岩手や宮城の被災地を取材しています。住宅や店舗、公共施設は再建してきました。公園で元気に遊ぶ園児や図書館で勉強に励む高校生……。奪われた光景が、時間をかけて戻ってきました。

ただ決して元通りにはならない。津波の恐ろしさを強く感じるとともに、復興の意味を自問しています。

記者の思い

防災、減災につながると信じて

福島民報社
南相馬支社記者
本間翔氏



東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で多くの死者と行方不明者が出た福島県南相馬市を、2018年4月から取材しています。未曾有の大災害を乗り越え、ひたむきに生きる人々に心を寄せ、かけがえのない記憶を後世に語り継ぐためには、何を伝えるべきかをよく考えた上での取材と執筆を心掛けています。

山形県に生まれ、高校1年の時に震災と原発事故が起きました。情報通信網の寸断で混乱が続く中、新聞が情報伝達に大きな役割を果たしたと知り、メディアの重要性を感じました。後に新聞記者を志すきっかけになりました。

原発事故に伴い全域が避難区域となった南相馬市小高区の復興状況や、福島・国際研究産業都市(イノベーション・コースト)構想の

実現に向けた新産業創出の動きなどを継続的に取材しています。現場を訪ね、自分の目と感覚で確かめ、偽りのない姿を伝え続けたいと思っています。

日々の取材には、相手への敬意を忘れずに臨んでいるつもりです。しかし、時に被災者にとってはつらいと感じる質問をしなければいけないこともあります。あのひと言が遺族の癒えぬ心を傷つけなかったか。10年の節目を機に自らの姿勢を見つめ直したいと考えています。

自然災害が頻発化し、震災に関する報道の存在意義はますます大きくなっていると感じています。それぞれの教訓を貴重な財産として伝え残すことで、防災や減災につながると信じています。

新聞の使命

まだ伝えねばならないことがある

東日本大震災

河北新報社
報道部長(当時は報道部主任)
今里直樹氏



「仙台市中心部に津波」「橋が崩落、死者多数」「砂浜に200~300の遺体」

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生し、直後から東北の被災地には真偽不明の流言が飛び交いました。絶望と恐怖に満ちた時間。皆、情報に飢えていました。翌朝、河北新報の販売店には長蛇の列ができました。自分たちは、どれほどの災害に遭遇したのか。立ち位置を確かめようと、被災者は新聞を求めました。

その日の紙面はわずか8ページ。自社で紙面制作ができず、緊急時の相互支援協定を結ぶ新潟日報社の協力を得て、紙面を組み上げました。新聞は避難所にも配られ、人々は

むさぼるように活字を追いました。

記者たちは終わりの見えない闘いを続けました。破壊し尽くされた街を歩き、遺族の叫びを聞き、日々桁が変わっていく死者数を追う。壮絶な現実、膨大な情報と向き合い、紙面に刻んでいきました。絶望、苦悩、疲弊。多くの記者が人知れず涙を流しました。

私たちを突き動かしていたのは使命感でした。地域に根差す記者の本能かもしれません。地域に、全国に、世界に、東北の今を伝えたい。河北新報はこの10年、1日も欠かさず被災地の今を報じてきました。震災に終わりはなく、その影響は現在進行形です。伝えねばならないことは、まだまだあります。

東日本大震災関連記事
3月12日(土) 夕刊
河北新報

死者・不明1100人超



東日本大震災

宮城県内犠牲者83人に 三陸の街水没・全壊多数

宮城県内、犠牲者83人に。三陸の街水没・全壊多数。福島原発、放射性物質漏れ。8万人が避難開始。

宮城県内、犠牲者83人に。三陸の街水没・全壊多数。福島原発、放射性物質漏れ。8万人が避難開始。

新聞の使命

被災者に伴走し、教訓を未来へ

熊本地震

熊本日日新聞社
編集局長(当時は編集委員)
毛利聖一氏



2016年4月14日午後9時26分、さらに16日午前1時25分。私たちは、28時間内に2度、震度7の激震に見舞われました。「地震が少ない県」。史実に基づかない思い込みは多大な犠牲と混乱をもたらす一方、貴重な気付きも与えてくれました。

発生後、力を入れたのは最新の被災状況に加え、避難住民への生活情報の提供でした。水や食料はどこで手に入るのか、災害ごみの処分は、罹災(りさい)証明のとり方は……。私たちは1年間、生活の変化に応じたミクロの情報を届け続けました。その経験は、昨年の熊本豪雨にも生かされました。

もう一つ重視したのが「俯瞰(ふかん)する

報道」です。発災後1か月から地震の特性を踏まえた連載企画「連鎖の衝撃」を開始。生死を分けた瞬間、災害関連死、災害弱者の避難、公共施設の耐震性など地震があぶり出した課題を多角的に検証しました。

反省も多々あります。目に見える被災地に報道が集中したこと、関連死や孤独死を防げなかったことはじくじたる思いです。災害報道で求められるのは先を読む力であり、「鳥の目」と「虫の目」を併せ持った視点です。地震から5年。被災者の復興はまだら模様です。今後も被災者に伴走しつつ、教訓を未来につなぐ地元紙の使命を果たしていく覚悟です。





被災直後や復興途上の写真展示

写真上:被災直後の釜石市唐丹町小白浜地区。津波は高さ12.5mの防潮堤をなぎ倒し、多くの家屋を破壊した。(2011年3月15日)

写真右:嵩上げ工事中の南三陸町(上)と、最終的に震災復興祈念公園が完成した2020年10月の南三陸町(下)。上下の写真を比べてみると、復興工事の過程で紆余曲折があったことが推察される。

おわりに

昨日の夕刊に掲載されていた新聞広告で偶然にもこの企画展のことを知り、慌てて本日、横浜関内の横浜情報文化センターを訪れた。以前にも何度か、報道写真展などで訪問したことはあったが、ニュースパーク(日本新聞博物館)との名称で常設展や企画展が開催されていることは知らなかった。今回の企画展はニュースパークが主催し、岩手日報社、河北新報社、福島民報社、福島民友新聞社が特別協力、神奈川県・横浜市・川崎市の各教育委員会の後援で開催されたとのことであった。

今回の企画展では、当然のこととして、地元紙による東日本大震災から10年間の紙面や写真、記者らの寄稿が中心となっていて、10年前の大震災と大津波災害、そして福島第一原発事故を被った被災地の方々がこの10年間でどのように過ごして来られたのか、その過程をあくまでも新聞記事を手掛かりにして辿ってみることを目的にしているようであった。言葉で言うのは簡単であるが、10年間に及ぶ新聞紙面を思いを込めて辿る作業は容易なことではない。

東日本大震災のみならず、兵庫県南部地震でも熊本地震でも、また先日の熱海市伊豆山の土石流災害や広島市の豪雨災害にしても、地域と密着している地元紙の役割は非常に大きいものがある。単なる事件や事故の報道だけでは済まされず、地元で生活する人々に密着して、必要な情報を絶えず提供し続けるというのは大変な役割であり、しかも報道関係者は同時に被災者であることも稀ではないであろう。これまでも例えば、神戸新聞社による『神戸新聞の100日』(角川ソフィア文庫)や、河北新報社による『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』(文藝春秋)などを読ませて頂く機会があったが、そのご苦勞の幾分かは理解できたつもりになっている。

ともかく、今回の企画展によって10年前のことを思い起こさせていただいたのは大変よい刺激になっており、今月末に仙台で開催される世界地震工学会議や震災対策技術展、その後に予定している三陸沿岸方面への見学旅行へとつなげて行ければと考えている次第である。